

小竹 英夫 著

『北海道医学教育史攷』

本書は、小竹英夫先生が平成五年（一九九三）五月から同一年（二〇〇三）三月にかけて、北海道医師会の機関紙「北海道医報」に連載した「北海道の医学教育」を改題し、一五年一月に出版したものであり、B5判二段組、四七七頁の大冊である。「あとがき」のなかで著者は、八二歳から九三歳までの一年間、眼科、耳鼻科、内科、整形外科などの病気で、入院、臥床をしたが、一回の休みもなく連載した、と記している。老齢にもめげない気力と体力、そして情熱に圧倒される。本書はまさしく先生の労作である。

著者を簡単に紹介すると、明治四三年（一九一〇）三月、札幌で生まれ、昭和九年（一九三四）北海道帝国大学医学部を卒業した。その後、北大附属医学専門部の教授、国立旭川病院の病院長を勤めた。昭和二五年（一九五〇）から同四九年（一九七四）までの二四年間、札幌市内にて開業、札幌市医師会理事、北海道医師会常任理事を勤め、現在は北海道医師会裁定委員であり、名実ともに道内医界の重鎮である。

小竹先生は、古くから北海道の医史について研究しており、昭和四一年（一九六六）、関場不二彦先生生誕百年記念会が刊行した『関場理堂選集』の編集委員、昭和五四年には『北海道医師会史（一九七九）』の編集委員長として出版に携わった。また昭和五六年（一九八一）には北海道新聞社から出版

した『北海道大百科事典』の医事・医人について担当し、二項目の執筆をしている。個人としては昭和五六年に『医事、文談』、二年後に『続医事・文談』を出版、平成四年（一九九二）には『柏倉忠肅とその周辺——札幌の開業医第一号』を出版した。

さて『北海道医学教育史攷』の内容は、松前藩立済衆館、箱館医学所兼病院、開拓使によって設立された札幌および函館医学校と函館病院による医育、（道）費による他府県医学校へ依託しての医師養成、道内の官民による医育機関設立の動き、北海道帝国大学医学部（北大医学部）、北海道帝国大学医学部臨時附属医学専門部、北海道庁立女子医学専門学校、道立札幌医科大学、国立旭川医科大学の項目からなっている。松前藩の済衆館は従来から医育機関とされていたが、著者は医師の養成には疑問視し、学術研修の場であり、のちに医師の養成を行う予定があったのかもしれない、としているが、同感である。

明治維新となり、開拓使は医療政策として、函館病院、札幌病院、根室病院を拠点にした地域医療の推進をはかる一方で、医師を養成するために札幌と函館に医学校を設立し、エルドリッジを招聘して、その任に当らせた。エルドリッジの教えをうけた石崎鼎吾、六角謙三が残した資料を新たに紹介している。両医学校とも、行政の変転、財政の貧困などにより消滅した。

札幌県や道の費用を支弁して、道外の医学校への生徒派遣

の資料は目新しいものである。

北海道帝国大学医学部（北大医学部）は札幌医学校、函館医学校の消滅以降、本格的な医育機関である。著者は北大九期生として、創設期の教授の講義をうけており、創設期の教授群像を詳細に記述している。

北大附属医学専門部、北海道庁立女子医学専門学校については戦時下の医学教育について垣間見ることができ。

道立札幌医科大学は初めての新制医科大学として発足した。国内初の心臓移植、学内での教育改革を行ったが、学園紛争にも巻込まれた。

国立旭川医科大学は道内三番目の医育機関として設立され、その創設期について記述している。

大学の独立行政法人化による医学部と附属病院の行方、そして新しい臨床研修制度の導入による医育機関、医療機関、北海道のような広大な地域の医療は、どうなっていくのか、大きな転換期を迎えている。このような時期での本書の出版は誠に当をえたものである。何よりも著者九三歳での大冊出版、研究者にとって非常に刺激的なことである。

（島田 保久）

〔北海道出版企画センター、札幌市北区北十八条西六―二〇、電話〇一一―七三七―一七五五、B五判、四七七頁、四七二五円〕

館澤貢次（文） 加古里子（絵）

『ドイツ人に敬愛された医師 肥沼信次』

主人公肥沼信次について今から約十年前前、母校の放射線科の教授により、「戦前、ドイツに留学した先輩の医師で、ベルリン大学の正式の放射線医学の教授の資格をとりながら、戦後ドイツの人々を伝染病から救うために残留して働き、世を去った人がいるのだが、調査してみないか」と声をかけられたのを記憶している。

その人物が「肥沼信次」であったことは後日知った。その当時は余り関心を持たないで聞き過ぎしてしまった。

今回、館澤貢次氏の『ドイツ人に愛された医師 肥沼信次』の書評を書くに当たり、日本医科大学図書館室長のT氏に依頼して、肥沼に関する資料を送っていただいた。それは肥沼が医学部四年生の時、大学の自治会報に投稿した論文「時空の統一理論に関する注意」昭和八年七月・学四・肥沼信次……、とあり、「一つの物体が、ある空間に位置する時の状態」をユークリッド空間とか、アインシュタイン空間とか、私の理解出来ない言葉と方程式を以て記述されていたのである。

肥沼は中学時代から数学が特別に好きな青年であったと聞いていたが、この新聞記事で、肥沼の姿を知る貴重な参考資料を得た感じがした。

（今回出版された肥沼信次伝について）

一九九五年（平成七年）に出版された館澤氏の著者『大戦